二〇二四年三月二二日

蒼穹を黄で刷くごとく花ミモザ　むべ
初蝶の虚子のやぐらを存問す　康子
白無垢に唐傘透ける春日かな　康子
老犬と歩調を合はせ青き踏む　みきお
朝窓を明るうしたる春の雪　やよい
一穢なき蒼天さして緑立つ　むべ
春うらら手水の水面揺れやまず　澄子

二〇二四年三月二一日

かがみ込み土筆と心通はせる　かえる
大粒の雨先立てて春雷す　かえる
春疾風大楠の揺れただならず　澄子
落椿とどまつてをる崖つ淵　康子
春山の奈落は森林浴めきぬ　せいじ
妻が指呼せる揚雲雀吾には見えず　せいじ
風の道知つてをるやに鳥帰る　みきお

二〇二四年三月二〇日

花舗の鉢なぎ倒したる春疾風　むべ
猫の目のごと照り翳る春時雨　ぽんこ
亡き夫の形見分けもし初彼岸　たか子
定まらぬ写経の字粒彼岸寒　うつぎ
土手の道続く限りに花菜畑　康子
夕餉にと摘む山道の蕗の薹　やよい
墓碑まえのすみれの小花抜かでをく　はく子
刎ねつるべめきたる風の雪柳　かえる

二〇二四年三月一九日

一張羅迷ふ三寒四温かな　澄子
芹を摘むことが目あての野辺歩き　千鶴
眉月を揚げし秀枝の桜かな　むべ
摘ませじと棘が袖引く山椒の芽　むべ
雨晴れてきたと高鳴る春の川　かえる
干し物の白に誘はれ初蝶来　わかば

二〇二四年三月一八日

金剛杖つく道の辺に蕗の薹　なつき
百幹の竹うち鳴らし春疾風　澄子
枯蓮亀の甲羅のごと水漬く　うつぎ
幌ひらく俥夫の手際や春時雨　康子
見るほどに心浮き立つ花ミモザ　わかば
外堀の水面煌めく城の春　ぽんこ
落椿関所めきたる峠道　なつき
のどけしや夕告ぐ鐘の間遠より　わかば
倒木と見たれど芽吹く力あり　澄子
花韮が根方を埋む大切株　かえる
学舎より風に乗りくる卒業歌　満天

二〇二四年三月一七日

売れ残る球根網に芽吹きけり　えいいち
一枚の休耕田いま花菜畑　こすもす
春水を延べし鏡に浮見堂　たか子
水掻きのオレンジ色や鴨進む　もとこ
杖にどうぞと枝並ぶ登山口　あひる

二〇二四年三月一六日

足弱の夫励ましつ青き踏む　ぽんこ
見晴るかす京の都は春霞　あひる
雛の宿地酒古銭も飾りたる　なつき
吟行の野に得し幸や土筆飯　わかば
七色に灯点る架橋春の宵　わかば
卒業の子にコサージュを直さるる　むべ